

新 潮 文 庫

ドン松五郎の生活

井上ひさし 著



新 潮 社

まつごろう せいかつ
ドン松五郎の生活

新潮文庫

い-14-4



昭和五十三年 五月二十五日 発行
昭和六十一年 二月二十五日 十八刷

著 者 井 上 ひ さ し

発 行 者 佐 藤 亮 一

発 行 所 株式 会社 新 潮 社

郵便番号 一六二
東京都新宿区矢来町七一
電話 業務部(〇三)二六六―五一
編集部(〇三)二六六―五四〇
振替 東京 四一八〇八番
定価はカバーに表示してあります。

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛ご送付ください。送料小社負担にてお取替えいたします。

④ 印刷・株式会社金羊社 製本・憲専堂製本株式会社
© Hisashi Inoue 1978 Printed in Japan

ISBN4-10-116804-0 C0193

新 潮 文 庫

ドン松五郎の生活

井上ひさし 著



新 潮 社 版

2465

目次

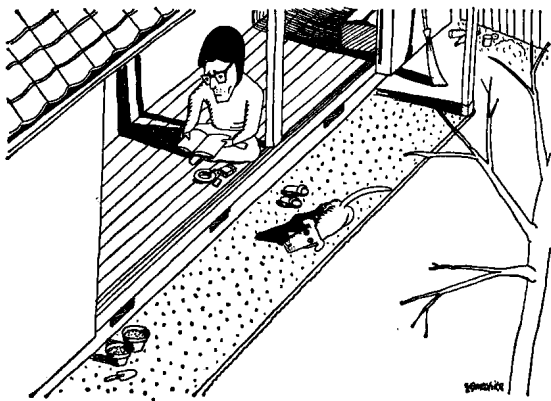
おれの生い立ち	七
おれの日常	七
おれの勉強	七
おれの抗争	一〇
おれの発心	一五
おれの栄達	三七
おれたちの作戦	二九
おれたちの挙兵	三九

おれたちの言い分……………	三九三
おれたちの出発……………	四二三
おれたちの機知……………	四九六
おれたちの戦い……………	五二五

解説	長部日出雄
カット	山下勇三

ドン松五郎の生活

おれの生い立ち



なんでも人間属の世界には、夏目漱石すうせきという大へんな文豪がいて、彼には『吾輩は猫である』なる表題の、戯文調の小説があるそうだ。戯文仕立てとはいえ、これはなみなみならぬ傑作であるらしい。

「……そうだ」とか「……らしい」とか、曖昧あいまいな言い方をしたが、じつはこの小説の冒頭を、おれはちゃんと暗記している。人間から見れば一匹の犬畜生にしかすぎない雑犬のおれが、なぜ『吾輩は猫である』の出だしの一節をそらんじているのか。理由は簡単である。おれの飼い主が漱石愛好家で、とりわけこの『吾輩は猫である』を座右から手放さず、ときおり声をあげて読む。それを聞いているうちにひとりで頭に入ってしまったのである。人間の世界の格言をもじっていうなら、「門前の雑犬、習わぬ小説を読む」というやつだ。

さて、なんでまた『吾輩は猫である』がのっけから出て来たかという、この理由もまことに簡単である。おれは、おれの飼い主以上にこの小説に尊敬の念を抱いているので、おれの物語をはじめめるにあたって、ぜひともこの小説の書き出しを借用したい、と考えたのだ。

なにしろ漱石という人間はえらい。おれの飼い主も、漱石と同業の小説家であるが、漱石はおれの飼い主の一万倍はえらい、と思う。ほんとうはすくなくとも十万倍はえらい、と考えているが、飼い主には一宿一飯の恩義がある。正確にいえば、おれがこの家に拾われてから百五十日になるから、百五十宿四百五十飯の恩義がある。恩義を重んじることでは人後、いや犬後に落ちないおれとしては、大いにゆずって一万倍という甘い点をつけたわけだ。

ではなぜ漱石という人間はえらいのか。この理由もまた簡単である。猫を主人公に持って来た

ばかりではなく、その猫に語り手をつとめさせた趣向がえらい。おれは犬だから猫は好かぬ。おれたちよりちびのくせに大ぐらいの無駄めし食い、主人の帰館を尻尾ふって出迎えることもせぬ礼儀知らず、人間の子どもの遊び相手もせぬぐうたらな怠けもの、どうせ死んでしまえば三味線の皮になり酒席の馬鹿さわぎの傍役つとめるくせに、生きている間は行いすまして妙に陰気で、その上、このごろの猫属はネズミをとるのも面倒臭くなったと見え、日向でごろ寝ばかりをきめこんでおる。「働かざるものは食うべからず」というコトバが人間の世界にはあるが、連中は働かず食っている。そこまで連中を甘やかしたのは人間であるから、人間が悪いのは言うまでもないが、飼われる身でありながら図々しくも増上し、つけあがる連中ほもつと悪い。それでいて人間がすこしでも辛くあたるとすぐ「化けて出てやるぞ」と半分すねて半分すごむのだから言語道断もつてのほかだが、しかし、犬という、あるいは猫という生物的かつ階級的区別をとりはらい、へ人間の家庭で飼われるものとして同じ立場に立てば、たとえ猫が主人公で語り手をつとめた小説であっても、あれはすばらしい作物である。なんとなればへ人間の家庭で飼われるものゝよろこびや哀しみを、あの小説は世間に喧伝してくれたからである。

ではその『吾輩は猫である』にならつておれの生い立ちを語りはじめることにしよう。

……おれは犬である。名前はまだ無い、というのは嘘で、ドン松五郎という。

仲間のはなしによると、犬には春生まれがもつとも多く、以下、秋、冬、夏の順になっているそうだが、おれの生まれたのは、いちばんその例の少ない夏、去年の夏の七月である。おれの性格が多少ひねくれているとしたら、そのせいかもしれぬ。

生まれたところは、東京の東の境界を流れる大きな川の、東岸のそばである。この辺一帯には安普請の建売住宅がひしめき合つて建っているが、そのうちの一軒の軒下で、ある夏の朝、おれ

はこの世に呱呱こゝろの声をあげた。

そのときはちょうど、新聞の配達人がその家の新聞受けに新聞を投げ込もうとしていたところ
で、おれの母親は、

（この仔犬こいぬたちはきつと将来、新聞とか、活字とかいうものになにかかわりのある家で飼われ
ることになるかもしれない）

と、直感したという。

人間の世界には「女の直感がよく当たる」というコトバがあるらしいが、おれたち犬の社会に
も、「雌犬の直感を軽かんじると棒に当たる」なる格言がある。「棒に当たる」とは痛い目にあうぞ、
というほどの意味だが、現におれはこうやって自分の身の上を活字で披露ひやうしているのだから、
「なにか新聞とか、活字とかいうものにかかわりがある」どころではない、これは大かかわり。
この格言はすくなくとも三分の一は的中したことになるだろう。

三分の一、というのはおれに二匹の兄弟がいたからで、二匹とも生後十日ほどの間に、他所ほかへ
貰もらわれて行ったとき、音信が絶えていたから、どこでどう飼われているかは知らないが、この格
言が、言い直せば母親の直感が正しいとすれば、おれの兄弟はいまごろは新聞記者か活字工かな
んかのところで居候いこうでもしているにちがいない。

おれの母親の飼い主は、近くの高校に奉職する地学の先生で、朝から晩まで石ころばかりいじ
っていた。母親のはなしでは、

「うちの先生はそうとうなかなたぶつらしいよ」

ということだったが、かたぶつだから石ころに興味があったのか、石ころに興味を持ちすぎて
かたぶつになったのか、そのへんのところはいま考えてもよくはわからぬ。

母親と一緒に暮らしていたころのおれは、まだ目が見えなかったので、この石ころ先生の顔を拝むことはできなかったが、声だけは聞き、匂いだけは嗅いだ。おれたち犬は視覚はてんで駄目の皮だが、聴覚と嗅覚は乳呑児ちのこも成犬なみなのだ。

で、おれが聞いたところでは石ころ先生の声の調子はのつぺらぼうで、高低もなければ強弱もなく、今にして思えば坊主のお経を読むような声音であった。石ころ先生が、あるとき、

「どうも生徒が授業中に居眠りばかりして困る」

と、奥さんに嘆いているのを耳にしたことがあるが、七月の暑いさかりにあののつぺらぼうな調子でこによこよと講義をされては、これは眠気をさそわれるのが当然で、起きて講義を聞いている生徒のほうがよくばどうかしている。

石ころ先生の体臭も変わっていた。人間の成人男子ならたいいてい、酒や煙草の匂いをぶんぶんさせているものだが、この先生ときたら石ころとチョークの匂いがするばかり。石ころ先生はおそらく建売住宅を手に入れるために酒も煙草も節約せざるを得なかったのだろう。

石ころ先生は、そのあだ名が示すように、石の如く無口な人だったが、彼の奥さんはおそろしくおしゃべりだった。おまけに甲高いきんきん声。その声を五分も聞くと、頭ががんがんにして、おれはきまって頭痛を起こしたものだ。そのたびに母親はおれの体をやさしく舐めまわしながら、「この奥さんはおしゃべりをしている間はまだ機嫌がいいのだよ。ひと月に一度か、二度、びたりとしやべらなくなることがあるけど、そのときの奥さんは不機嫌のかたまりだから、気をつけたほうがいい。御飯のお預けを食うとか、サンダルで蹴かとばされるとか、なにかよくないことがきつと起こるのだからね。奥さんのおしゃべりはそういったことは当分起こらないという、わたしたちにとっては仕合わせのしるしなんだよ」

と、慰めてくれた。

はじめのうちは、へえ、そういうものかと思って辛抱していたが、そのうちにおれの心に疑問がひとつ湧いてきた。

犬を飼うぐらいだから、石ころ先生もその奥さんも犬好きのはずである。なのになぜ、虫の居所がちよつと変わったぐらいで、御飯のお預けをしたり足で蹴つとばしたりするのであるか。たとえばここに着物の好きな奥さんがいるとする。その奥さんは不機嫌なときに、着物を簞笥から出して畳の上に散らかし、踏みにじったり蹴つとばしたりするのであるか。また、読書の好きな奥さんがいくら不愉快なことがあったとはいえ、書棚の本を外へ投げつけたりするか。おそらくしないだろう。

「なのになぜ、おれたち犬にだけは当たり散らすのだろうなあ」

いくら考えてもわからないので、おれはとうとう母親にそう聞いた。

「ここの御夫婦はほんとうに犬が好きなんじゃないんだよ」

と、母親はすこし悲しそうな口ぶりでおれの問いに答えた。

「好きではないけれど、世間体というものが人間の世界にはあるのだねえ。隣近所ではみんな犬を飼っている。それではわが家でも……というのが人間の考え方なのだよ。好き嫌いとは関係がないのさ」

これがおれが「世間体」というコトバと出つくわした最初である。このコトバとは以後行く先でお目にかかることになり、このごろでは「へん、また人間さまお得意の世間体か」と軽く聞き流す余裕も出来てきたが、はじめのうち、おれは世間体とは人間世界の王様か殿様であろう、と思っていた。なにしろ世間体というコトバに、人間はすこぶる弱いようだったからである。

さて、生まれて十二、三日ほどたったある朝のこと、おれはなんとなく世の中の様子がおかしいということに気がついた。前の日までとくらべあたりが妙に静かなのである。首をかしげながら母親の乳房をくわえて乳を飲んでいるうちにおれはなぜあたりが静かなのか、そのわけに思い当たった。石ころ先生の奥さんがどうしたわけか、その朝は口をきかないのだった。

鼻をうごめかして様子をさぐると、母親の前の食器も空っぽのようである。

「御飯もらえなかったんだね」

と、おれは母親に言った。

「それなのに、おればかりお乳を飲んで悪いなあ」

「いいからいまのうちに腹をいっぱいにしておきなさい」

と、母親はなぜだか、湿っぽい口調で言った。

「いまのうちに！」

母親のこの言葉にこめられていた悲しい意味を、おれはそのときは理解することが出来なかった。

この「いまのうちに乳を腹いっぱい飲んでおくのだよ」という母親のコトバの意味が、おれにもおぼろげながら見当がついたのは、石ころ先生の奥さんにいきなり首筋を掴まれて、母親の乳房から引き離され、宙にぶら下げられたときである。彼女の邪慳な動作から、おれは、

（あ、石ころ先生の奥さんはおれを母親の傍からどこかへ連れて行くつもりだな）

と、ぴんときた。

「おれどこへも行きたかないや。ここに置いてくれるよう、石ころ先生の奥さんに頼んでくれよ」と、泣き声をあげると、下方から母親がおれをやさしく叱咤した。

「飼い主が一旦そうと決めたら、飼われている身のわたしにはどう逆立ちしたって、それを止めることはできないんだよ。いまのわたしに出来ることは、おまえの幸運を神さまに祈ることだけ。達者でお暮らし。どうかやさしい飼い主にめぐり逢えますように」

聞いているうちになんだか悲しくなり、胸がつまって声が出ない。宙にぶら下げられたまま手足をばたつかせていると、どきりと音がしてまだ見えぬ目から火が出たような気がした。

おれはどうやら木箱のような容器の底にほうり込まれたらしい。鼻と尻尾で探るに、四方はざらざらした板の壁で、ぶんと木の匂いがした。それから木箱が四、五回、大きくゆらゆらと揺れて、ごとんとどこかの床の上に置かれたような気がした。同時につんと鼻の穴めがけて、怪しい臭気がとびこんできた。あとで知ったことだが、それはガソリンの臭気だった。

母親の声はそれっきり聞こえなくなってしまうた。ちいさくなつてくんくん鼻を鳴らしている、やがて木箱をのせた床ががたがた震えだした。そしてぶるんぶるんという面妖めんような音が聞こえはじめた。

今、考えればなんのことはない、おれは木箱のまま自動車の後の座席に乘せられていただけのはなしだが、そのときはこの世にそんなものがあるとは知らぬから、ただ怯え、ひたすら震えているばかり。

そのうちに、木箱の前に二人、横に一人、人間が坐った。木箱の横に坐った人間からは石ころとチョークの匂いがした。となると匂いの主は石ころ先生にちがいない。木箱の前の右からはおしろいの匂い、これは石ころ先生の奥さんである。そして、木箱の前の左手に、小便の匂い。これは石ころ先生夫妻のひとり息子だ。寝小便がまだ治らず、年中、奥さんに叱られているからすぐわかる。

「さあ、小学校と高校へ送って行ってあげます」

と、奥さんがなにかをごとごとと操作しながらぶつきら棒な口調で言い、それからこうつけ加えた。

「……帰りに仔犬を始末してきますからね」

始末というコトバの意味は、そのときのおれにはよくはわからなかったが、奥さんの声にはなにか知らぬ思わずぞつとして身の毛がよだつような響きがあった。

(逃げよう！)

と、おれはとっさに心を決めて板の壁をさかんに手で引っ掻いたが、口惜しいことにまだ目が見えない。どこに手のかかるところがあるのか、まるで見当がつかぬ。

ぶるんぶるんぶるんという音が高くなり、車が勢いよく前に飛び出した。おれはその弾みを食らって思い切り木箱の板壁に鼻をぶつつけてしまった。鼻の奥がきいんときな臭くなり、しばらくのあいだ、様ざまな匂いが一緒くたになって鼻の穴のなかで渦巻いていた。前にも言ったと思うが、犬にとって鼻はもっとも大切な器官である。人間にたとえれば目の玉ほども大事なところである。物事を識別するのもまず鼻からだ。そこをぶつつけたのだから、おれは痛いのが半分、恨みが半分の唸り声をあげた。

「ママの運転は乱暴だなあ」

前の席の左側で（あとで知ったことだが、前の席の左側を助手台、右側を運転席というのだそうだ）、小学生の男の子が言った。

「こんな運転でよく人を引っかけないですんでるね」

「ママだって、周囲に人の気配があれば静かに発進するわよ」